

## 幕末明治の写真師列伝 第三十九回 内田九一 その四

江戸時代に「ころり」という流行病（はやりやまい）があった。今で言うコレラである。これは当時長崎でこの病を「トンコロリン」と言っており、また長崎の人々が「三日トンコロ」とも名づけて、非常に恐れられたものであったからだという。

日本におけるコレラの発生は、宗田一『図説・日本医療文化史』（思文閣出版、1989年）に拠れば、文政5年（1822）8月が最初であった。1817年には、インダス河流域から海外に伝搬し、中国、朝鮮半島を経て日本の下関に入ったとされ、東進して箱根の山を越えることなく終焉したとのことである。日本ではこの第一次のコレラ流行から36年後の安政5年（1858）に、第二次のコレラ流行が起こった。幕末の黒船来航のときである。これは米艦ミシシッピー号が清国から長崎に入港した際に、同号のコレラ患者が長崎にコレラを流行らせたこととされる。これが東進して、この当時およそ28万人の死者を出したという。

安政5年（1858）当時、長崎の人口は約3万人で、その内コレラ患者は1583人。その内訳は日本人が982人、オランダ人が601人で、治癒した者はそれぞれ436人と380人であったと記されている。日本人の死亡率は約55.6%、オランダ人は約36.8%である。

この時の長崎海軍伝習所の医官は、安政3年（1855）8月に幕府の招聘に応じて遙遙長崎に來日したオランダ医ポンペ・バン・メールデルフォールト（Pompe, van Meerdervoort, Julius Lydius Catharinus）であった。ポンペはコレラの予防のため生の魚や野菜等の食事を禁止した。ついで長崎奉行所に衛生行政の重要性を説き、病院の設立を要請し、長崎養生所が出来た。この時ポンペがおこなったコレラの治療法はキニーネと阿片の投与が主で、温湯やブドウ酒を投与していた。

このように長崎では文政5年（1822）8月からコレラ患者はいたと思われるから、内田九一の両親が共にこのコレラで亡くなったとしても、不自然なことではない。またこの時のコレラの治療に苦勞したポンペ、松本良順、吉雄圭齋が内田九一のその後の人生に多大な影響をもたらしたのも事実である。

『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』『長崎洋学史』『西洋医術伝来史』によると、安政2年（1855）、内田九一は伯父である医師・吉雄圭齋からも写真術を学んだという。おそらく内田九一は吉雄圭齋から基礎的な医学、薬学の知識を中心に学んでいたであろう。また『アサヒカメラ』（昭和12年2月号）の松尾轟明「日本写真大年表 黎明編（続）」における「西紀一八五八年、安政五年戊午」の項によると、「大井ト新、長崎で寫眞術を研究す。先輩に松本良順、上野彦馬、内田九一、阿部徳等の寫眞家と親交す。」と記述されている。内田九一は舎密試験所でこの松本良順の養育庇護を受け、松本良順を通じてポンペとも懇意となり、この松本の薦めで安政6年（1859）、写真術研究を申し出て承諾されている。

このあたり様子は要約するが、『幕末の武家』、『蘭学全

盛時代と蘭疇の生涯』、『松本順自伝（蘭疇自伝）』などによると、およそ次のように記載されている。

ある日、安政3年にオランダから送ってもらった暗箱と薬品を使ってポンペが長崎の風景撮影を自宅で試みていた。そんな時、松本良順がちょうど休暇でポンペの家を訪ねてきた。松本良順はポンペが撮影しているのを見て、この写真術に興味を示すと、ポンペからいっしょに撮影をしないかと誘われて、撮影を手伝うことになったが、なかなかうまくいかない。ある日、長崎に大阪の相撲大関熊川の一行が乗り込んで興行した。松本良順も相撲は好きでさっそく弟子たちを連れて相撲見物に出かけたところ、一人の西洋人が写真機でこの相撲の土俵の勝負を撮影しようとしている。傍にいた通訳の横山又之丞に尋ねたら、英国の写真師だという。じっとしているのを写すのでさえ難しい写真撮影であるのは知っていた松本良順は、この西洋人に声をかけ、後日、この相撲取りの一行を自分の自宅に連れてゆくのでそこで撮影したらいいと、この西洋人の相撲撮影を援助してやることにした。その夜のうちにさっそく長崎奉行岡部駿河守に今日のことを語り、快くその許可を得た。翌日、昨日の訳をポンペに語り、くだんの西洋人にも伝えた。また門弟の筑後福岡藩士の前田玄造を自宅に招いて、松本良順はくだんの西洋人を自宅で待っていたのだが何かあったのか来ない。この時にただ待っていても仕方がないので、前田玄造が持ってきていた筑前公よりお預かりの写真機で、門弟数十人と共に勢ぞろいした写真と、松本が日本古来の甲冑を自身で着けた写真の撮影を試みた。結局、翌日の日曜日に相撲興行も終了したので、この力士一行を和蘭館に招いて、この西洋人に撮影させた。その後この西洋人に、前田玄造が30日ばかり随行しているうちに、前田玄造は大変うまく写真が写せるようになった。この西洋人は後に長崎を去るにあたって、前にポンペがうまく撮影ができなかったのは、写真機が悪かったのだからと、自分の持っていた写真機と薬品をポンペに贈り、またこの薬品の購入方法を教え、上海の英国商館にあてて紹介状も書いてくれた。

湿板写真に限れば、前田玄造は長崎で最も早くこの外国人から直接、この写真術を学び習得したといえる。ついでながら、あの上野彦馬もはじめはこの前田玄造から指導を受けたという。また、この西洋人はフランス人職業写真家ロシエのことだといわれている。ロシエは、ロンドンのネグレッティ・アンド・ザンブラ社から第2次アヘン戦争の報道取材の依頼を受けて最初中国へ後安政6年から万延元年までの間に、長崎、横浜を訪れている。そのため英国人と誤解されたのであろう。このロシエは長崎に來た際に、前田玄造の他にも、福岡藩士古川俊平、上野彦馬にも写真術を教えたという。上野彦馬がロシエの影響を受けたことは、上野彦馬が書いた『舎密局必携』（文久2年）の中に「來舶の私人魯支英（ロシエ）の説」として、ロシエの教えからの引用があることからわかる。

（森重和雄）